

## 第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

### 報告書資料 一般-56

|  |   |
|--|---|
| 学校名・団体名  | 西尾市立平坂中学校   |
| HPアドレス   | <a href="http://www.nishio.ed.jp/heisaka-chu/">http://www.nishio.ed.jp/heisaka-chu/</a> |
| コース  | 学校支援  |
| 活動・研究<br>テーマ   | アクティブラーニングを導入した<br>社会科授業の実践   |
| <p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>現在、アクティブラーニングに代表されるように、教師主導の一斉授業から学習者主導の授業へと教育観の転換について議論がなされている。そのような中、アクティブラーニングを導入した授業の実践を各教科で積み重ね、その効果を検証していくことは喫緊の課題であるといえる。</p> <p>本研究では「学び合い」型の授業を導入することが学習者に与える影響について検証する。これによって、アクティブラーニングの可能性の一つとしての「学び合い」型の授業について検討することを目的とする。</p> |   |

## 1 研究の概要

本研究では、中学校1年生社会科の授業において、「学び合い」の考え方を導入し、アクティブ・ラーニングとしての実効性と学習者に与える影響について検証した。その結果、男女間の平均得点の差が他の一斉講義型の授業より小さくなり、学習者間の学力の格差を縮小させる可能性が示された。

## 2 活動時期・内容

### (1) 9月~12月 実践・調査

#### ①本研究における授業デザイン

学習者主導の授業で生徒どおしの豊富な言語交流が展開されることが本研究の授業デザインの特色である。おしなべていえば、中学校社会科の授業は一斉講義形式の授業がほとんどである。挙手により、学習者が発言する場面は見られるものの、授業時間内において教師が発話する時間の割合の方が多い。本研究では、「学び合い」の時間を設定し、学習者がかわり合う相手を自由に選択し交流する時間を保証する。これによって、学習者主導の時間を実現した。

#### ②授業の実際

毎時間、生徒たちが15分以上の自由に交流する時間を保障した授業を継続して行った。その交流時間には、生徒たちが交流する相手を自分で選択して、たくさん言語交流をする姿が見られた。実際に調査してみると、11個の重要語句を習得する必要があるアメリカ合衆国の工業の学習で、生徒Aは20分間の自由交流の時間に重要語句を107回発話していた。このことから自由に交流する時間を保障することで豊富な言語交流が生徒間で行われていることが明らかになった。

### (2) 10月3日(土) 研究指導会 講師：上越教育大学教職大学院 教授 水落 芳明

本研究の調査方法や臨床教科教育学会での発表のための研究データの検討、予稿の作成について指導をいただいた。教育研究では、授業記録による質的な調査が主になってしまい、主観的な研究になる危険性を指摘していただいた。アンケート調査や発話回数をカウント、分析する量的な調査もあわせて用いることで研究の成果の記述に客観性をもたせる方法を学ぶことができた。

### (3) 1月10日(日) 第14回臨床教科教育学セミナー 研究発表(於：玉川大学)

本研究で調査、分析した成果を臨床教科教育学会で発表をした。発表後の質疑応答の場面で、本研究について充実した議論をすることができた。本研究の成果の一つとして男女間で学力に差が、集団の学力差を縮小する効果があることが明らかになった。それに対し、男子の学力が向上したのか、女子の学力が低下したのかという学力差が縮小した理由について質問をうけた。この議論で格差の縮小の構造についてさらに研究する必要があることがわかった。また、一斉講義型の授業は男性と女性で学習効果に差を縮小させなかったということに着目した検討も必要であることがわかった。

### (4) 2月18日(木) 現職教育 講師：上越教育大学教職大学院

次回の指導要領改訂の視点の一つとして、アクティブ・ラーニングが挙げられる。このアクティブ・ラーニングについて、上越教育大学より水落芳明先生をお招きして、全職員を対象に講演会を開いた。21世紀型学力では、知識や技能以上に、新しいものを創りだしたり、解決したりする思考力・判断力・表現力が重要になることを教えていただいた。その力をつけるためのアクティブ・ラーニングの実現をする方法について全職員で理解を深めることができた。印象的であったのは協働的な学習を実現するには、授業手法以上に日々の学級経営や人間関係づくりが重要であることを強調されていたことである。

## 3 成果・課題

今回の研究で明らかになったのは以下の4点である。

○学習者間の自由交流や板書などの学習環境が教師の支援より意識され、生徒主導のアクティブラーニングが実現する。

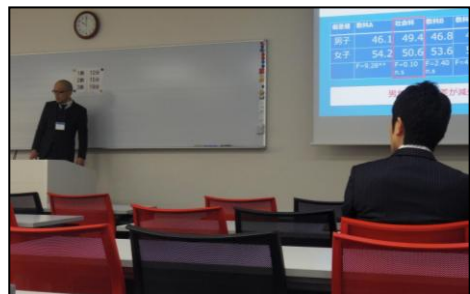
○生徒の話す力が向上する。 ○男女間の学力差が縮小する。

○多様な生徒と言語交流を繰り返す中で学習を深めている。

今後の研究の課題として、「学び合い」型の授業で生徒主導の授業で習得させるべきことの定着をうながすような思考ツールについて研究をしていきたい。



(写真1) 自由交流をする生徒の様子



(写真2) 研究発表の様子



(写真3) 大学教授による現職教育の様子